戦史叢書

大本營陸軍部

〈3〉

—昭和十七年四月まで—

防衛庁防衛研修所
戦　史　室　　著

朝雲新聞社

昭和四十五年六月二十日印刷
昭和四十五年六月二十五日発行

戦史叢書　大本營陸軍部〈3〉—昭和十七年四月まで

定価二、九〇〇円

著作者　防衛庁防衛研修所戦史室
発行者　中島義雅
印刷所　日放印刷株式会社
発行所　株式会社朝雲新聞社
東京都港区芝栄町九光輪会館
振替口座東京一七六〇〇番
電話(431)九三二番(436)〇三八六—七番

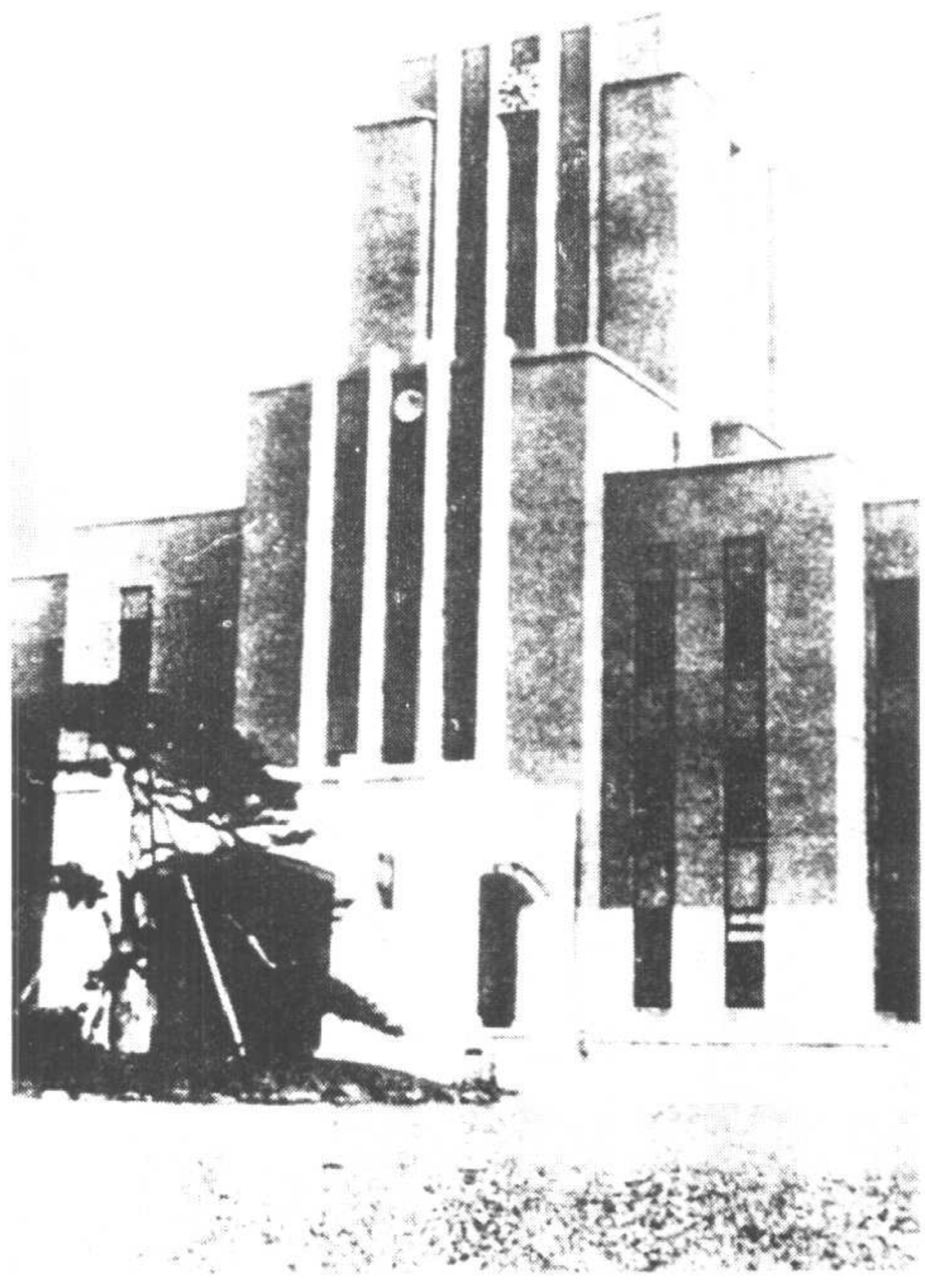
乱丁本落丁本はお取替えいたします

© 防衛庁防衛研修所 1970
3331—1035—0033

参謀総長　　杉山元大将
（昭15. 10. 3～昭19. 2. 21）

参謀次長　　田辺盛武中将
（昭16. 11. 6～昭18. 4. 8）

大本營陸軍部門札



大本營陸軍部玄関（昭一六・一二・一五　三宅坂から市ケ谷に移転開庁）

支那派遣軍総司令官　畑俊六大将
（昭16. 3. 1～昭19. 11. 12）

關東軍（総）司令官　梅津美治郎大将
昭14. 9. 7～（昭17. 10. 1～昭19. 7. 18）

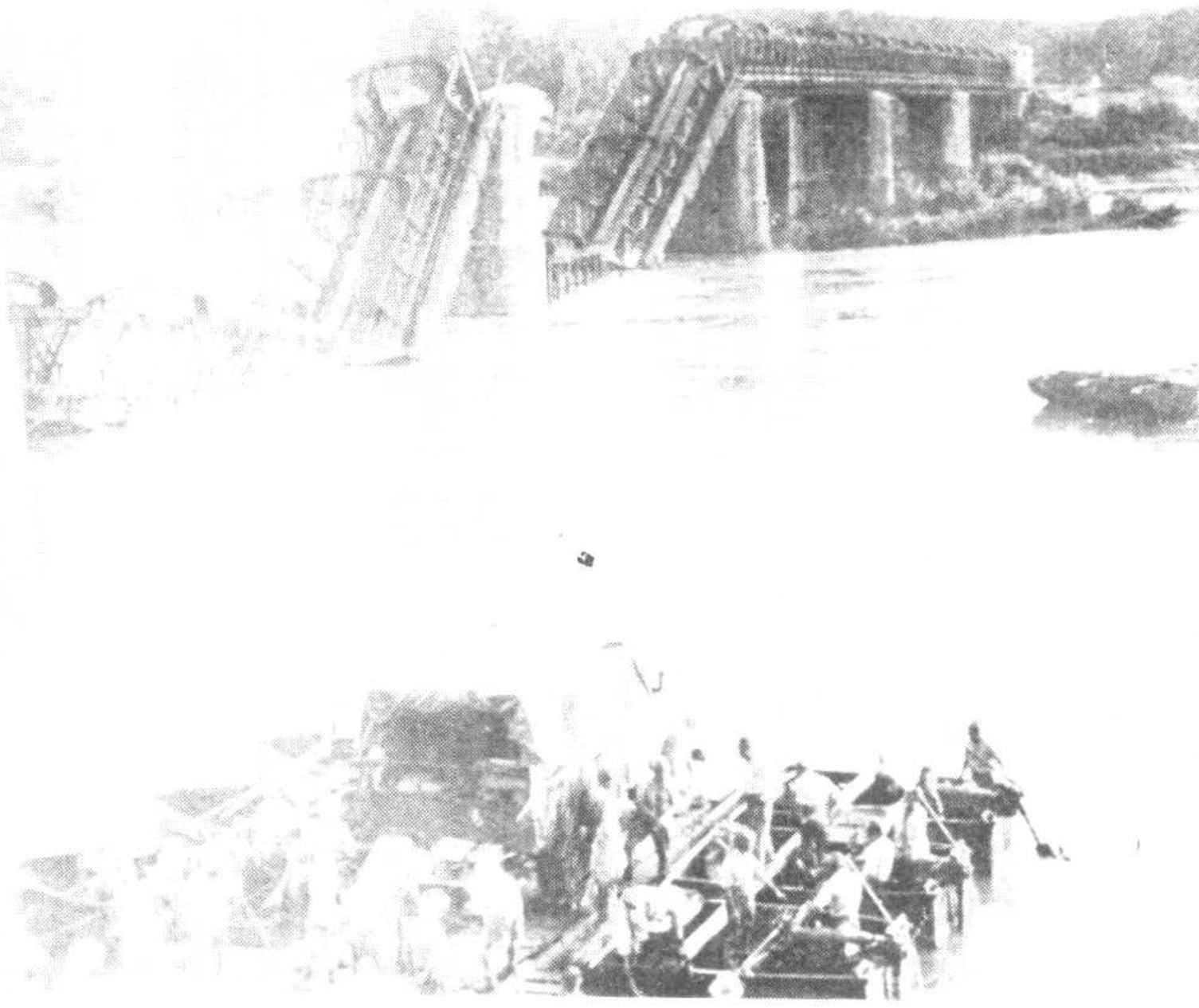
南方軍総司令官
寺内壽一大将
（昭16. 11. 6～昭21. 6. 12）

防衛総司令官　東久邇宮稔彦王大将
（昭16. 12. 9～昭20. 4. 15）

防衛総司令官　山田乙三大将
（昭16. 7. 7～昭16. 12. 9）

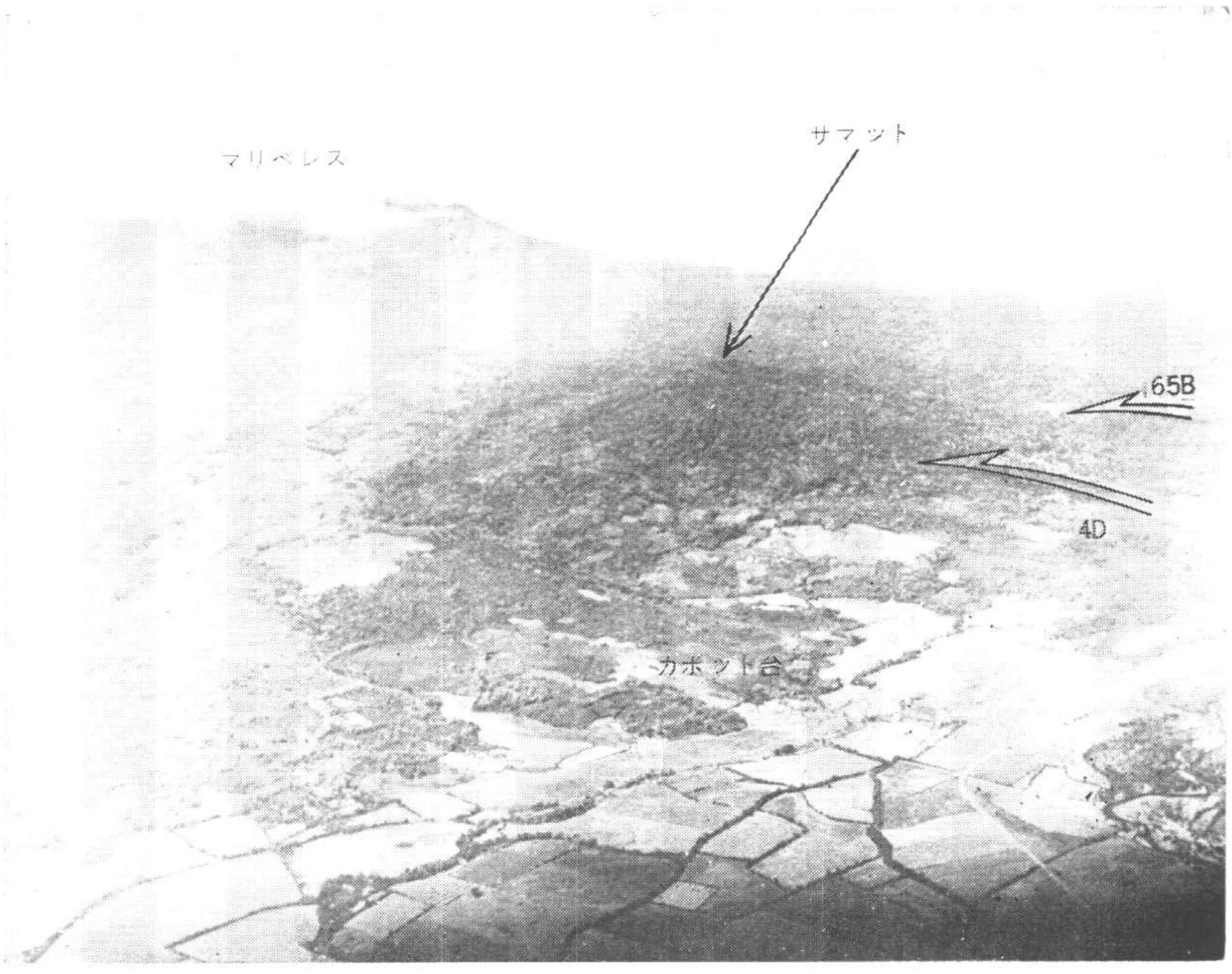
ラングーン爆撃（昭16.12.23）

パレンバン空挺降下（昭17.2.14）

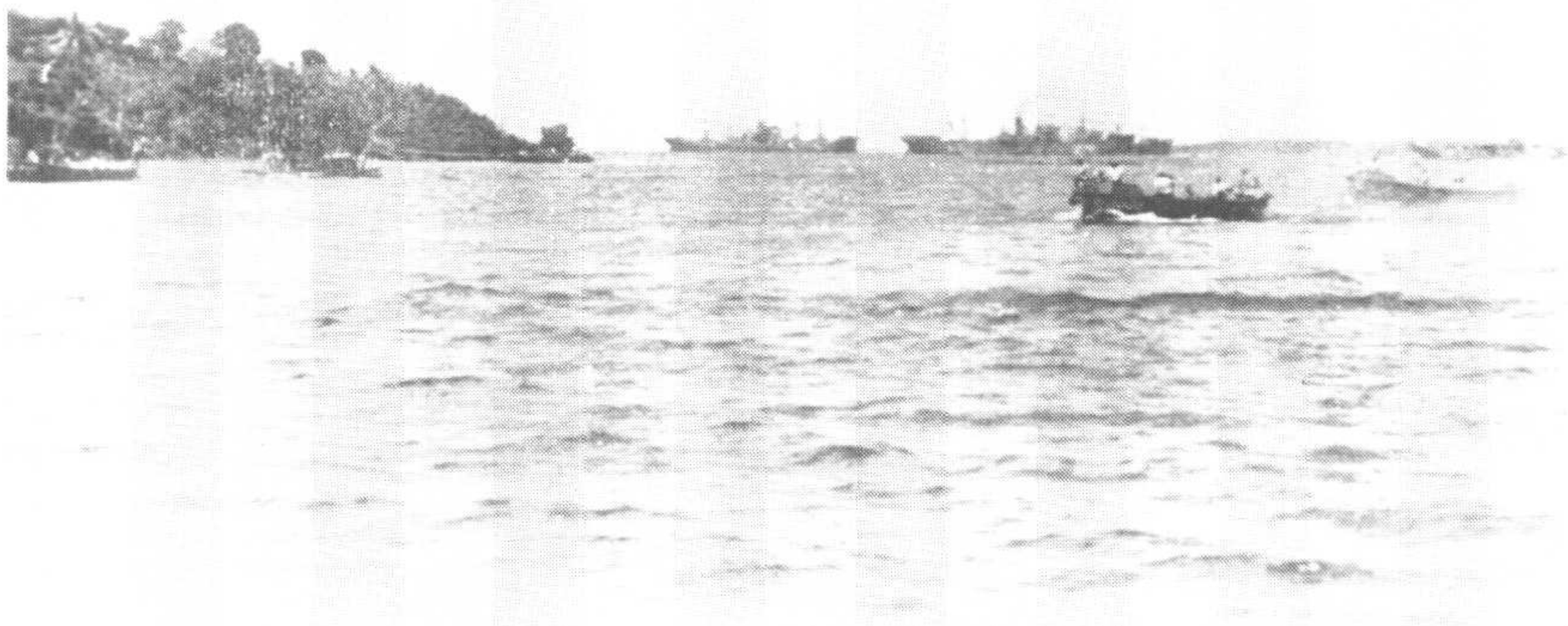


爆破されたペラク河の鉄道橋
（昭16.12.23）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



バタアン半島サマット，マリベレス山



第十六軍主力のパンタム湾上陸
(昭17.3.1)

序

戦史室が創設されて十余年、昭和四十一年からその研究調査の成果を左記のとおり逐次刊行し、今回、その第三十五回として、本書が発刊される運びとなった。

本書の編纂（さん）に当たっては、自衛隊の教育または研究の資とすることを主目的とし、兼ねて一般の利用についても配慮した。

終戦時において、大量の史料の消滅と散逸をきたし、そのうえ、戦史室の開設までに十年間の空白を生じたため、史実の調査と戦史編纂の困難さは、既往内外のそれに比して、筆舌に尽くしがたいものがあった。しかし幸いにも、関係方面の理解と多数歴戦者各位の熱誠あふれる協力とによって、この刊行を実現し得たものであって、ここに改めて深く謝意を表する次第である。

記述に当たっては、紙面の関係などで割愛したものも少なくない。また今後、さらに新たな史料の収集によって、加筆修正を必要とするものがあることも予想される。引き続いて、部内外の協力と叱正とを懇願してやまない。

本書は、戦史編纂官島貫武治の執筆にかかるものである。

なお、本書記述の内容に関する責任は、戦史室長と執筆者のみにあることを特に付言する。

昭和四十五年六月

防衛研修所
戦史室長　西浦　進

既刊・戦史叢書（頭書の数字は配本番号）

(1) マレー進攻作戦
(2) 比島攻略作戦
(3) 蘭印攻略作戦
(4) 一号作戦〈1〉南の会戦
(5) ビルマ攻略作戦
(6) 中部太平洋陸軍作戦〈1〉—マリアナ玉砕まで
(7) 東部ニューギニア方面陸軍航空作戦
(8) 大本営陸軍部〈1〉昭和十五年五月まで
(9) 陸軍軍需動員〈1〉—計画編
(10) ハワイ作戦
(11) 沖縄方面陸軍作戦
(12) マリアナ沖海戦
(13) 中部太平洋陸軍作戦〈2〉ペリリュー・アンガウル・硫黄島
(14) 南太平洋陸軍作戦〈1〉ポートモレスビー・ガ島初期作戦
(15) インパール作戦—ビルマの防衛
(16) 一号作戦〈2〉湖南の会戦
(17) 沖縄方面海軍作戦
(18) 北支の治安戦〈1〉
(19) 本土防空作戦
(20) 大本営陸軍部〈2〉昭和十六年十二月まで
(21) 北東方面陸軍作戦〈1〉アッツの玉砕
(22) 西部ニューギニア方面陸軍航空作戦
(23) 豪北方面陸軍作戦
(24) 比島マレー方面海軍進攻作戦
(25) イラワジ会戦—ビルマ防衛の破綻
(26) 蘭印・ベンガル湾方面海軍進攻作戦
(27) 關東軍〈1〉—対ソ戦備・ノモンハン事件
(28) 南太平洋陸軍作戦〈2〉ガダルカナル・ブナ作戦
(29) 北東方面海軍作戦
(30) 一号作戦〈3〉廣西の会戦
(31) 海軍軍戦備〈1〉昭和十六年十一月まで
(32) シッタン・明号作戦—ビルマ戦線の崩壊と泰・佛印の防衛
(33) 陸軍軍需動員〈2〉—実施編
(34) 南方進攻陸軍航空作戦

まえがき

一　大本營陸軍部（全一〇巻）の第一巻は、日本陸軍創設以来、昭和十五年初頭に至る七〇年間の陸軍中央部の施策について、同第二巻は、昭和十六年十二月一日、米英蘭に対し開戦を決意し、翌二日開戦日を十二月八日と決定するまでの大本營陸軍部の国防用兵の大綱についてそれぞれ記述した。

同第三巻の本書は、これに続いてドゥリットル帝都空襲の前日、昭和十七年四月十七日までの大東亞戦争間、最もはなばなしい戦果を収めていた時点における大本營陸軍部の戦争指導ないし作戦指導の概要を記述したものである。

二　第一章においては、日獨伊連合政戦略や戦争指導の基本問題など開戦時の政戦略問題に触れるとともに、南方、中國、北方に対する開戦に伴う施策ならびに開戦時の陸海軍の軍容、兵站、交通に関する準備など、開戦時における全般情勢を明らかにするに努めた。

第二章においては、先制急襲を主眼とするわが開戦指導と、これを受けて有利な開戦、特に内外に対する政略的狙いを主としつつ、着々と極東戦備を進めていった米英の開戦指導を対比して記述した。

第三章においては、開戦から昭和十七年一月中旬までの開戦初期の赫々たる戦果に基づく作戦、戦争の指導を述べるとともに、連合国の対日開戦に伴う動きを概説した。

第四章においては、一月中旬から、シンガポールを攻略した二月中旬に至る間の作戦指導、特にジャワ、ビルマ、南太平洋などへの戦果拡大の作戦が指導された状況を述べるとともに、連合軍の対応策にも触れた。

第五章においては、二月中旬から三月中旬までの前記諸作戦進展の状況を述べるとともに、主として南方要域攻略後いかに作戦ならびに戦争を指導するかの検討の経緯を記述した。

第六章においては、三月中旬から四月中旬までの作戦が開戦前の計画よりも拡大していく状況を記すとともに、

陸軍としては長期不敗の政戦略態勢の確立を本旨としつつ、爾後の作戦をいかに指導しようとしていたかを明らかにするに努めた。

三　大東亞戦争における陸軍用兵は、南方戦線のみならず中國戦域、満洲の大陸にも及び、南方戦線においてもビルマから東部ニューギニアにまで拡散し、各方面ごとに並行して作戦行動が進められていた。

本書においては、おおむね一カ月ごとに各方面別に記述しているので、相互関連の理解は必ずしも容易でない。

このため、巻末に「付録第一、第二」の日暦の一覧表を掲げて参考に資することにした。

凡　例

一　戦争、戦役、事変名などは、当時の公式または一般称呼を用いた。たとえば、いわゆる日華事変または日中戦争を「支那事変」というなどである。

二　統帥関係では、露国革命後においても、ソビエト連邦をソ連のほか依然露国とも称呼していた。また中華民國を当時、一般に支那と呼んでいた。本書ではその称呼を用いたところが少なくない。

三　外国名または外国地名は、泰国―タイ、緬甸―ビルマなど適宜併用した。

四　引用原文中の読みにくい漢字、特に地名などには、適宜ふりがなを付けた。

五　部隊符号は、日本軍については当時の陸海軍のものを使用するのを本則とした。日本軍の「聯隊」「聯合艦隊」については、固有名詞として「聯」の字を用いた。

六　日時は一般には日本中央標準時に拠った。その他の場合は特に注記した。

七　時刻は、一三〇（十三時三十分）または午後一時三十分のように、二つの表現方法を用いた。

八　氏名、官職の下のアラビア数字は、陸軍士官学校卒業期別を示す。

九　（　）内のアラビア数字は、史料の出所を示し、巻末に一括掲記した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

序
まえがき・凡例
第一章　開戦時の戦略と軍容……一
一　日獨伊連合政戦略……一
日獨伊三国同盟の締結（1）
三国同盟のねらい（3）
日ソ中立条約と獨ソ開戦（5）
日米交渉と三国同盟（7）
獨ソ戦況の把握（9）
獨伊の対米参戦（11）
二　戦争指導の基本問題……三
国是と国防の本義（13）
対米英蘭戦争の戦争目的（15）
宣戦の詔書と勅語（17）
短期戦争終結の意見（20）
長期持久戦争の採択（22）
戦争終末促進の腹案（23）
三　対米英蘭開戦に伴う戦略問題……六
世界戦争の一環としての戦略（26）
欧州戦局の判断（27）
南方持久戦略の成否（29）
南方防衛圏の検討（32）
海軍の防備と外郭要地に対する作戦（34）
南方攻略作戦に対する陸海軍の基本戦略（36）
陸軍の南方作戦計画の問題点（38）
四　米英の対枢軸戦略……四
米英の連合戦略―ABC―一（41）
米国陸海軍の統合戦略―レインボー五号（43）
勝利の計画（44）

フィリピンの防衛強化 (47)
マレー、フィリピン、ハワイにおける
彼我兵力配分 (49)
五 開戦決意に伴う対支施策……三
開戦決意に伴う大本営の行事予定 (53)
開戦に伴う支那事変の見通しと
大本営の企図 (54)
開戦に伴う支那派遣軍の基本任務 (56)
香港攻略命令の伝宣 (58)
在支敵国権益処理の命令伝宣 (61)
露国が参戦した場合の支那派遣軍の
作戦要領 (63)
六 開戦決意に伴う關東軍等に
対する施策……六
南方作戦発動に伴う対露作戦計画 (66)
關東軍の新任務と編組 (68)
關東軍の苦悩 (70)
關東軍の兵力資材の要請 (71)
国土防衛に関する措置 (75)
七 開戦時における陸軍の軍容……七
開戦時における陸軍全般編成 (77)
開戦時における大本営陸軍部の主要編制 (78)
開戦時における陸軍部隊 (78)
軍および師団の増強の推移 (83)
八 兵站、交通に関する準備……八三
概説 (83)
対米英蘭戦争帝国陸軍作戦計画に
基づく兵站計画の大綱 (85)
船舶輸送に関する大本営の施策 (87)
鉄道に関する作戦準備 (91)
軍事鉄道機関と鉄道隊 (93)
通信に関する大本営の施策 (95)
兵站総監部の機構と運営の大要 (96)
九 開戦時における海軍の軍容……一〇三
開戦時における海軍部隊全般編成 (102)
開戦時における海軍外戦部隊 (102)

第二章 先制急襲の開戦指導（概して昭和十六年十二月初頭から開戦前夜まで）……一〇五

一　情勢の急迫に応ずる開戦指導……一〇五
先制急襲の根本方針（105）
つばぜり合いの境地（107）
開戦日の繰り上げ問題（109）
龍田丸の偽装航海（111）
二　杉坂少佐機事件……一一三
十二月一日、杉坂少佐機墜落（112）
十二月五日、企図暴露せずと判定（115）
三　米英の対日戦備強化に対処……一一七
米英の対日戦備強化を警戒（117）
マレー方面英軍増勢に対する対策（119）
甲案、乙案採択に関する指令（122）
マレー半島への渡洋進撃（124）
四　英国の対日開戦指導……一二八
英海軍の極東増派（128）
マタドール計画発動の条件付認可（129）
マタドール計画発動の機を失す（131）
五　タイ国に対する自主的進駐……一三一
タイ国進駐に関する方針（132）
対タイ措置要領（~~136~~ 134）
タイ国進入に関する参謀総長指示（138）
対佛印施策（139）
タイ国進駐に関する交渉開始の日時（142）
中部タイ進駐日時の問題（143）
ピブン首相の失踪（しっそう）と自主的進駐（144）
六　眞珠湾奇襲作戦……一四六
山本聯合艦隊司令長官の
ハワイ奇襲作戦構想（146）
軍令部の反対意見（148）
大型空母六隻をもってする
ハワイ奇襲作戦の採択（150）
七　開戦通告に関する問題……一五一
日米交渉の打ち切り通告（152）
打電の時機と手交の時刻（154）
英蘭両国に対する開戦通告（156）
八　米国の対日開戦指導……一五八
日本外交暗号の解読（158）
和戦の関頭に立つ日本に対する米国（159）

十一月二十六日、「ハル覚書」発出 (161)
十一月二十七日、戦争警戒命令 (163)
十一月二十八日、重大決議 (164)

第三章　開戦初期の作戦指導（概して開戦から昭和十七年一月中旬まで）……一七三

一　開戦劈頭の大戦果……一七三
マレー上陸と香港攻略開始 (173)
眞珠灣奇襲の成功 (174)
宣戦の詔書と勅語の下賜 (176)
タイ国への進入 (177)
開戦第一日の大戦果 (178)
大本營陸軍部の情勢判断 (181)
開戦第二日のマレー方面の戦況 (182)
勅語と戦果発表問題 (184)
大勢を決せる開戦第三日 (187)

二　戦争指導上の対外問題……一九二
戦争の呼称と戦争指導の大綱 (192)
獨伊の参戦と三国協定調印 (194)
日獨伊軍事協定要綱 (196)
日獨伊軍事協定に関する上奏 (198)
日獨からの開戦を待望 (167)
眞珠灣攻撃に対する可能性判断 (169)

三　有利な戦況に応ずる作戦構想……二〇一
日獨伊軍事協定の交渉開始 (201)
十二月九日、日佛印軍事現地協定成立 (202)
十二月十一日、日泰攻守同盟仮調印 (204)
十二月十三日、日泰協同作戦要綱締結 (206)
十二月十三日、対蘭印戦争指導要領決定 (208)
シンガポール攻略の促進 (210)
南方軍、モールメン占領を発令 (212)
大本營、全般作戦を促進 (214)
大本營のビルマ作戦構想 (216)
作戦の急進と後方の強化 (219)
海軍の第二段作戦構想積極化 (221)
香港攻略策応の第二次長沙作戦 (225)
対重慶屈伏工作 (228)
対ソ情勢判断 (230)

対ソ兵力転用の構想　(232)
昭和十七年度時局兵備要綱案　(234)
四　情勢の進展に応ずる対策……二六
米英の報復対策とソ連の動向の検討　(238)
今後の戦争指導に関する陸軍部の一考察　(241)
獨逸の戦争指導に関する一観察　(242)
情勢の進展に伴う当面の施策策定経緯　(245)
「情勢ノ進展ニ伴フ当面ノ施策
　ニ関スル件」決定　(246)
日獨伊軍事協定の意義　(249)
日獨伊軍事協定締結　(252)
日泰同盟条約調印　(254)
日泰協同作戦に関する協定の経緯　(255)
日泰協同作戦に関する協定締結　(257)
五　連合国の対日開戦に伴う戦争指導……二九
アーケーディア会談の開催　(259)
チャーチル英首相の情勢判断　(260)
連合戦略の決定　(262)
西南太平洋（ABDA）戦域　(264)
反枢軸同盟と連合参謀本部　(267)
生産に関する勝利の計画　(268)
六　南方作戦の指導……三〇
第十四軍の上陸成功と
　米比軍のバタアンへの撤退　(270)
首都マニラの攻略　(272)
クワンタン上陸の中止　(276)
攻略日程の短縮　(279)
カムラン下協定　(282)
総協第四号と第三十八師団の転用　(284)
南方軍、第五飛行集団と
　第四十八師団を転用　(285)
大本營のマニラ攻略後の作戦指導　(288)
第二段作戦構想と南方作戦の経過予想　(290)
南方作戦爾後の指導　(292)
緬甸作戦要領（一月十四日案）　(294)
七　中國戦線と対ソ作戦準備……三六
香港要塞の攻略　(296)
第二次長沙作戦の苦戦　(298)
対ソ作戦準備の促進　(300)

第四章　戦果拡大の作戦指導（概して昭和十七年一月中旬から二月中旬まで）……三〇三

一　南方作戦の促進……三〇三
バタアン陣地の力攻（303）
バタアンの戦況に対する情勢判断（306）
ジョホール水道への突進（310）
S作戦の中止（311）
ジャワ外郭要地の攻略着手（313）
攻略日程の延期（マニラ会談）（316）
攻略日程に対する南方軍と大本営の応酬（318）
チモール作戦に伴うポルトガル問題（321）
ビルマ作戦の再検討（325）
ビルマ作戦の発動（327）
ラバウル攻略（329）
南太平洋方面作戦の拡大（331）
英領ニューギニア、ソロモン諸島
　作戦発令（333）
二　南方要域攻略後の作戦の検討……三三六
大本營陸軍部の構想（336）
海軍の第二段作戦構想（339）
今後の作戦に関する陸軍省部の懇談（341）
陸海両統帥部長の懇談（342）
船舶による作戦の制約（345）
作戦を拘束する航空戦力（348）
三　占領地の確保と軍政……三五〇
占領地の防衛兵力と配置（350）
警備と航空基地に関する陸海軍協定（352）
大東亜の建設構想（355）
軍政に対する大臣の区処権問題（356）
四　中國情勢と対北方施策……三五八
緒戦の戦果が中國に及ぼした影響と
　その対策（358）
香港防衛司令官設置案（360）
香港占領地総督部設置（362）
關東軍の対ソ作戦構想（364）
關東軍作戦準備の実情（367）
獨ソ戦の推移判断（369）
対ソ問題の再検討（371）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com